

東大寺の大仏は、靈山に囲まれた紫香樂でつくられ始めたことについては前回お話ししました。今回は、大仏造営事業がもたらしたものについてお話しします。

紫香樂で始まった大仏造営事業は、日本の宗教史上大きな二つの出来事とかわり合っていました。

一つは、大仏造営に代表される国家による仏教受容です。それまでは、天皇家が寺院を造営することがある、にとどまっていたのですが、仏教によって国家そのものを守る「鎮護国家」という考え方を国政の中心に据える時代を迎えたのでした。

中でも、天平勝宝元年(749)には聖武天皇自ら出家して勝萬と名乗っています。天皇の出家は初めてのこと。この時期、いかに仏教に傾倒していたかがうかがわれます。

もう一つは、それぞれに存在していた仏教(ホトケ)と日本在来の神信仰(カミ)と

が融合し始めたことでした。

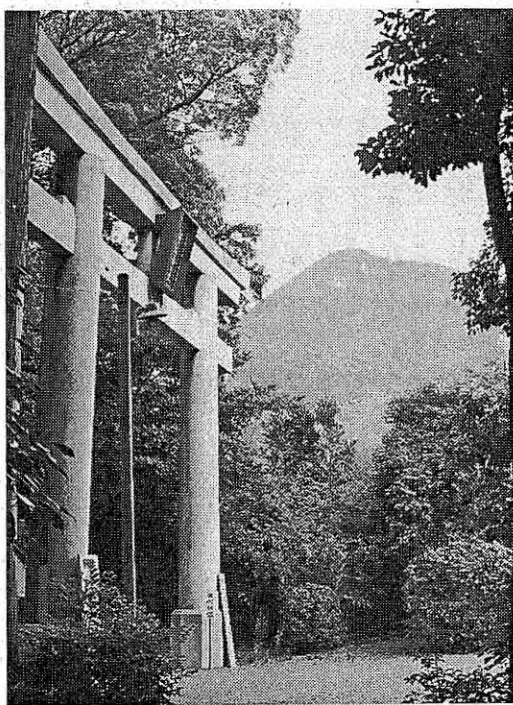
天平19年(747)、大仏造営が佳境にさしかかってきたころのこと。朝廷が豊前国(現在の大分県)宇佐八幡宮に大仏造営成就の祈願をしたところ、驚くべき託宣が出されました。八幡神は「私は、高天原の神々と地上にいます神々を率いて大仏造営事業を応援しよう」と語ったのです。つまり、国家的な仏教政策を神々が応援しようというのです。

国家が仏教を受け入れたことにより、宇佐八幡神のように諸国の神々が8世紀後半から9世紀前半にかけて、仏教に協力したり従属したいという意思を示すようになったのです。こうして神社の傍らに寺が建てられ神宮寺となり、神前で読経がなされるようになります。

この時点ではそれは従来のカミに対する信仰を圧迫することなく神祇信仰と仏教信仰とが互いに補い合うかたちと

神仏習合のはじまり

三上山と御上神社



に加えて国学の普及による神仏習合が不純視されるようになりまし。社会現象としての廃仏棄釈が行われ、神仏習合の廃止、仏像を神体にするなどの禁止、神社から仏教的要素の払拭などが行われたのでした。この折、慶応4年(1868)から明治4年(1871)ごろまでの数年間、現在は国宝に指定されている興福寺の五重塔が売りに出されたり、薩摩藩で1616の寺が廃され29,666人のぼる僧侶が還俗させられたのでした。

なっていました。それは、第13回の白鬚明神の話に、琵琶湖をめぐる神と仏との関係として表れていたとおりです。

滋賀県でも宝龜年間(770~780)に御上神社の神宮寺が、延暦4年(785)には日吉大社の神宮寺が、貞観7年(865)には奥嶋神宮寺が建てられたことが知られています。

後に、絶対的存在としての府主導による神道優位の風潮

これらの寺院の復旧には莫大な努力が払われたものの、多くは明治以前の状況に戻ることはありませんでした。とはいえ、現在の私たちはこれらのカミとホトケが混じり合う不思議な生活習慣に慣れてくわします。これは、今から1250年前の大仏造営事業を大きなきっかけとしていたのです。

「神仏分離令」が出され、政(滋賀県教育委員会 畑中英)

大仏造営事業が大きな影響